

# みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ノマディズムと遠距離通信：  
マダガスカル，ヴェズ漁民における社会空間の重層  
化

|       |                                                                                                   |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2012-09-28<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 飯田, 卓<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15021/00000923">https://doi.org/10.15021/00000923</a>                 |

## 第10章 ノマディズムと遠距離通信 ——マダガスカル、ヴェズ漁民における社会空間の重層化——

飯田 卓  
国立民族学博物館

マダガスカル南西部のヴェズ漁民は、天候が安定する季節に、500キロメートル以上離れたキャンプ地で漁を行う。このような季節の出漁者は、ある村では人口の半数近くに達し、期間は数ヶ月におよぶことが多い。こうした半遊動的な生活を営む人びとにとって、携帯電話の普及はどのような意味をもったのか。本章では、携帯電話に先行して普及した無線やラジオの使用などもふまえながら、携帯電話の普及が社会に与えたインパクトを考察した。ヴェズ社会では、口コミによる情報交換がきわめて長距離にまでおよんでいたため、携帯電話が遠距離通信手段として画期的だったとはいえない。しかし、パーソナルなメッセージを瞬時に伝える手段としての役割は大きく、親密な人びととの結びつきを強化した。また漁師たちは、出漁先で知りあった人びとと、姻族に準じる関係を築くようになった。このことから、携帯電話は、物理的距離を越えて人間関係を維持・構築するのに有効だったことがわかる。しかし、こうした社会的効果のほかに、身を置いた場所に関わりなくパーソナリティを使い分けるといった身体的効果も現れつつある。携帯電話の普及の効果は、今後も、社会と身体の両面から検討していく余地がある。

- |                               |                                       |
|-------------------------------|---------------------------------------|
| 1 はじめに                        | 4.2 アンパシラヴァ村の携帯ユーザーとサービス：2010年の状況 (2) |
| 2 ヴェズ漁民                       | 4.3 アンパシラヴァ村の携帯利用行動：2010年の状況 (3)      |
| 3 遠距離通信の普及                    | 4.4 ディレクトリの分析 (1)                     |
| 4 事例研究                        | 4.5 ディレクトリの分析 (2)                     |
| 4.1 はじめての町で待ち合わせ：2010年の状況 (1) | 5 結びとして                               |

\* キーワード：携帯電話、パーソナル・メディア、社会、身体

### 1 はじめに

テレビ映像についてある共著論文を書いたとき、共著者であるわたしたちは、ある提案をした。それは、映像試聴に際して、そのときの状況を体験の要素として記憶に組みこむ努力をしてはどうかというものだった。映像体験というと普通、映像の内容そのものに関する印象や考察を指す。わたしたちが提案したのは、そうした個人的な反応だけでなく、自分以外の誰とどこでその映像を視聴し、どのような意見交換があったかを、

体験として記憶しようということだった（松田ほか 2005）。この提案は、メディア研究の文脈からみれば、メディア体験における身体の分裂や忘却をのり越えることを目指していた。

マクルーハンの議論によれば、複数の感覚領域に訴えかける「クールなメディア」は、メディアへの参与を求める傾向がある（マクルーハン 1987: 23-24）。つまり、複数感覚を身のまわりからメディアに向けに直すことにより、身のまわりの環境を一時的に忘却することになるのである。こうした指摘は、大澤によると、「クールなメディア」が他者として自己にどこまでも近接してくる事態をとらえたものにほかならない（大澤 1995: 83-84）。この特異な他者性は、現代の多くの電子メディアが備えているものであり、ときに身体の分裂という感覚をも生み出すという（大澤 1995: 45-46）。

こうした身体の分裂や忘却をのり越え、メディアをもっと身近な他者に還元しようというのが、わたしたち共著者の提案であった。そうすれば、必然的にバイアスや誤りをともなう電子メディアから距離をとり、ひとつの見かたとして映像作品を位置づけることが習慣化するのではないかと考えたのである。

ところで、メディアの洗練によって変容を受けるのは、個々の身体にとどまらない。社会空間の編成原理も、文字や国家の発生以来、ゆっくりと変化してきた。それらが発生する以前、およびその影響力が弱い時代、社会空間は対面的な関係の粗密によって層化されており、身体を中心とした同心円のような構造をもっていた。しかし、文字や国家の影響力が全面的に広がり、電子メディアが地球をくまなく覆っている現在、個人は、国家に代表される超越者として面識のない構成員と関わるのが普通になっている（大澤 1995）。こうした分断化にまつわる問題は、最近は「無縁社会」という言葉と関わらせて問題化されることが多い。

こうした社会の「メディア的変容」に対しては、身体の変容と異なり、技術的な解決が提案されている。それが、本書であつかわれている地域 SNS である。比較的小さな地域の動向を議論しようとする地域 SNS では、あいかわらず小さな「超越者」（プロバイダや管理者）を必要とするものの、地理的に身近な範囲を重要な社会空間として見なおす契機となる。したがって、個人どうしの繋がりの希薄化など、メディアの進展が深刻化させた問題も改善すると期待されているのである。

しかし、人間の身体と社会、ならびにメディアの変容は、相互に影響しあうかたちで展開しており、結末の予断を許さない。本章では視点をややずらし、メディアの作用にほとんど関係なく共同体をとび出た人たちに目を向けたい。とくに着目したいのは、共同体の「分裂」の後に普及した遠隔通信の技術を、彼らがどのように受容したかということである。これを見ることが、社会編成の矛盾を技術で再調停する可能性と、その限界について見通しをつけたい。また、メディア研究が行われている日本や欧米と異なる社会をとりあげ、メディア普及のプロセスをミクロな水準から記述することで、メディ

ア利用の比較研究にも示唆を与えるような資料を提供したい。

本章でとりあげるのは、季節的に村を離れて漁を行うマダガスカルの漁民である。彼らは、1年のうちある期間は村で生活をおくるわけだから、完全に共同体を離脱しているわけではない。完全に共同体を離脱する点では移民などが対象として適当だろうが、現代の移民は、共同体を離れる前に遠隔通信の手段を手に行っていることが普通である。つまり、移民の決断をおこなった時点ですでに遠隔通信技術に依存していると考えられ、メディア普及の初期的効果を論じるには限界がある。一方、本章で着目する漁民は、季節的移動を始めた時点で、ラジオや短波無線といった公共的な電子メディアしか手にしていなかった。そして、2010年秋に携帯電話が村で使えるようになったときには、携帯電話機の爆発的な普及をみた。共同体を離れることの矛盾がどのように技術で解決されたのか、それを考えるうえで、移動漁民の例は適当といえよう。

## 2 ヴェズ漁民

アフリカ大陸の東にあるマダガスカル島は、西の半砂漠から東の熱帯雨林にいたるまで、多様な気候に富んでいる。漁撈民ヴェズが多く居住しているのは、乾燥した西海岸である。この地域は雨が少ないため、農耕に適さない土地も少なくない。そうした事情もあって、農耕にまったく依存せず漁撈のみを行う人びとがみられる。

彼らヴェズは、16世紀から19世紀にかけて栄えたサカラヴァ王国の領土内で、カースト的な集団としてアイデンティティを形成してきたと考えられている。もしそうだとすれば、ある種の特権集団として領土内の各地で頻繁に遊動してきたのかもしれない。フランスの植民地統治が終わる頃に書かれた民族誌も、彼らの少なくとも一部が季節的に場所を変えて漁を行っていたと報告している (Battistini 1964; Koechlin 1975)。このため彼らは、セミ・ノマッド (半遊動民) だと考えられるようになった。

だが、彼らの移動距離がとりわけ遠くまで達するようになったのは、20世紀も終わりにさしかかってからである。わたしが調査していたアンパシラヴァ村では、1992年にナマコ潜水漁師たちが500キロメートルほど北のマインティラスに出漁し、1993年にはサメ刺網漁師たちがあとを追った (図1 参照<sup>1)</sup>)。ナマコもフカヒレも、この頃の貿易の自由化に伴い、東南アジアや中国に食材として輸出されるようになった商品である。これらの商品に対する需用の高まりを受けて、一攫千金をねらう漁師たちが率先して、それまで行かなかった漁場を開拓していったのである (飯田 2008)。

それまでの彼らの行動圏は、生活物資の買いだしのため、せいぜい50キロメートルほどの範囲に収まることがほとんどだった。それが、経済環境の変化で10倍にまで広がったのである。この変化は一部にのみ起こったのではなく、多数の村で起こった。人口の多い出漁先では、出身村を同じくする者たちがそれぞれにコロニーを形成し、小さな無



### 3 遠距離通信の普及

1995～96年当時、出漁していた男たちは、妻子と離れて暮らしていた。2003年にはこの状況が変わったが、それでも、兄弟や親子が離ればなれに暮らしていたことには変わりない。それにもかかわらず、遠隔地出漁のあいだ、離ればなれになった家族の間では通信がほとんど行われなかった。しかし、通信手段がまったくなかったわけではないので、そのようすを概観しておこう。

まず考えられるのは郵便だが、マダガスカル政府や企業は、村落部への配達サービスを行っていない。郵便物はもっぱら私書箱留め置きとなるが、これを利用する村人はいなかった。郵便局自体が村にはなく、50キロメートル先の町に行かなければならないからである。わたしが村に長期滞在していたとき、町に行く人に頼んで、日本への郵便を投函してもらおうとしたことがある。小さな町だったのだが、郵便局の場所を説明するのに苦労した。そのうえこの人は、郵便局が閉まってもポストに投函できるということを知らなかったため、村でわたしが託した郵便物を結局持ちかえてきた。郵便のシステムがいかに理解されなかったかがわかる。

ただし、離れている人に対して手紙を書くことはある。村と町との間には頻繁に往来があるから、簡単な伝言を紙に書いて渡すのである。面倒なら宛名も省略できる。小さな村に伝言を頼む場合には、親戚などを訪ねて定期的に往来している人を頼ればよいから、急ぎでないかぎり何らかの通信手段が確保されることが多い。

もっとも急を要するのは、病気や死去についての連絡である。とくに死去の場合、遅くとも1週間後くらいに葬儀が行われるので、これに間に合うよう近親者を集めなければならない。このときは手紙に頼ていられないので、家族や知人が手分けしてカヌーや牛車で迎えに行く。この労をとってくれる人が家族でない場合には、謝礼が支払われるようである。

また、まれにはあるが、交通手段を確保できる人に対しては、無線連絡で急な知らせを告げることもある。役場や郵便局があるような大きめの町には専門の交信手がいて、市民の依頼に応じて、別の町にいる同じ立場の交信手に伝言するサービスを行っている。ただし、伝言を受けた交信手はそれを配達することはせず、交信録に要点だけを書きとめ、関係者が通ったとき告げるだけである。無線による急な伝言をうまく受けとめることはできるのは、無線を多用する人か、理由があって連絡を待つ人だけだろう。

このため、漁師も無線連絡を利用することはほとんどないようだった。後述するJさんは、2010年にわたしと携帯電話で連絡をとりあうようになった人だが、そのようにメディアを使いこなす人ですら、無線連絡の経験が2回あるだけで、そのうちの1回は、携帯電話を使いはじめからの補助手段としてだった。

ずっと後年、2009年になってから、民放ラジオに伝言のコーナーがあることを知った。

これはラジオ局にサービス料を払って、近況を広く知らせてもらうというものである。この地域では長らく国営ラジオしか受信できなかったから、ラジオの伝言サービスは当時まだ新しかったと思う。無線による伝言と同様、確実な配信を期待できるわけではないが、配信の相手となる潜在的利用者は無線の利用者より多いだろう。ラジオはわざわざ交信所に行かなくとも聞けるし、知人をとおしてラジオの話題が伝わる可能性も高い。ちなみに、わたしが聴取したときは死亡通知らしき伝言がなく、早く帰れという知らせや、船が転覆して家財が流失して困っているという、伝言ともはやきともつかないものがあった。

この伝達手段においては、複数の口コミ圏域に情報を提供するというかたちでマスメディアが重要な役割を担っており、マスコミュニケーションのありかたとして興味深い。しかし、そうしたかたちでラジオが力をもつ前に、携帯電話というパーソナルなメディアが普及し始めた。

わたし自身がマダガスカルで携帯電話を使い始めたのは、2007年のことである。この時点ですでに、州都レベルの都市では給与生活者の間で携帯電話が普及しており、新規ユーザーのわたしもその利便性を実感した。それまで、公衆電話は数が少なく並んで使わなければならなかったし、大学関係者などは固定電話の前で仕事をするのが少なく、アポをとるために何度も電話して数日を費やすのが普通だった。携帯電話が普及してダイレクトに連絡がとれるようになってからは、マダガスカルに着くなり複数のアポをとり、短い滞在期間でも仕事ははかどるようになった（飯田 印刷中）。ただし、小さな町や村へは電波が届かなかったので、携帯はあくまで、大都市内部のコミュニケーションを担うメディアにすぎなかった。

その後わたしはほぼ半年おきにマダガスカルに渡航し、博物館の資料収集のために村落部を広く移動していた。この間、3つの携帯電話会社がそれぞれに通話エリアを拡大し、小さな町でも携帯電話が使えるようになっていった。首都在住者に電話をかけて、いま首都でなく地方都市に來ていると言われることも多くなった。このような動きを受けて、2009年1月にアンパシラヴァ村を訪れたとき、世話になっているJさんに携帯電話機をプレゼントした。そのときには、無風のときに高い丘に登れば村でも電波が入るといわれていたが、わたしの滞在中にそれを試みた者はおらず、電波は入らないことが普通だったと考えてよい<sup>2)</sup>。1年たって2010年1月に村を訪れたときは、電話番号を教えてくれた若者が2人ほどいたが、遠くの場合へ出漁したときに使うだけであり、村では使っていないと言われた。そのときに尋ねたところ、2008～09年頃から携帯電話機を持ち始めた者が若干おり、アンパシラヴァ村での初期ユーザーとみなすことができる。

## 4 事例研究

### 4.1 はじめての町で待ち合わせ：2010年の状況（1）

2010年7月の調査では、マダガスカルに着いてしばらくのあいだ、首都近辺を移動しながらアンパシラヴァ村のJさんに連絡をとろうとした。このときの滞在では村を訪れる時間的余裕がなかったが、彼らがキャンプを営んでいるはずのマインティラスあたりまでなら行けるかもしれないと思ったのである（図1）。マインティラスは、国内22の地域圏のうちメラキ地域圏の行政的な中心だから、すべての電話会社の通話エリアに入っていると思われた。

7月16日に電話がつながったとき、Jさんはマインティラスでなく、村から50キロメートル北にあるムルンベという町にいた。これからマインティラス方面に漁に出かけるが、ムルンベの知人を訪ねるために逗留しているのだという。マインティラスは、ムルンベからさらに400キロメートルほど北に位置する。わたしは彼らのキャンプを訪ねたいと希望を伝えた。首都からマインティラスまでは600キロメートルほどの距離があるが、まずアンパシラヴァ村に行って出漁先を確認して彼らを追うなら、2000キロメートルちかくを移動しなければならない。それに比べれば近いものである。

このときは互いの予定が不確定だったので、Jさんがマインティラスに着いてから連絡をとろうと約束して電話を切った。7月24日にJさんがマインティラスから電話してきたとき、これから通話エリア外の島に行くと彼は告げた。その後の予定が変わっても、マインティラスのXさんに伝言しておけば、それに合わせて迎えに行つてやるということだった。わたしはXさんの電話番号を書きとめ、たぶん8月1日頃にマインティラスへ行くと伝えた。

わたしがマインティラスに着いたのは、8月6日の朝だった。その前に何度かXさんに電話をかけたが、Jさんは島から戻っておらず、したがってわたしの伝言も伝わっていなかった。マインティラスではXさんがバスステーションまで迎えに来てくれ、自宅に案内してくれた。話を聞くと、Jさんがキャンプを営んでいるのはマインティラスから遠く、さらに60キロメートルほど北のタンブフラヌの沖合いであるという。タンブフラヌまで自動車で行けば、内陸を通るので110キロメートル。未舗装なので1日近くかかり、島まで船で渡るとなると1夜を明かさなければならないが、ホテルも知り合いの家もない。

思案にくれていると、Xさんは、Jさんがタンブフラヌから無線で伝言を残したかどうか確認しに行こうという。そこで、マインティラスの無線局で交信手に尋ねると、今朝Jさんがタンブフラヌからマインティラス宛てに伝言を残しており、その日のバスでマインティラスに向かうという。はたして翌朝早く、わたしがまだ眠っている間にJさんは陸路で到着し、次の日の午後にわたしとJさんはまた陸路でタンブフラヌへ向かっ

た。

ちなみにこのときの無線連絡は、前節で述べたJさんによる無線連絡経験2回のうち1回である。残りの1回は、やはりキャンプをいとなみつつ出漁しているとき、現地で世話になった人がほかの町に行っている間に村へ帰らなくてはならなくなったため、その人の出先に無線連絡を入れたという。Jさんがすでに40代半ばで、キャンプ出漁の経験もゆたかであることを考えれば、漁師はほとんど無線連絡に依存していないといえる。なかにはヘビーユーザーもいるのかもしれないが、その数はきわめて少ないとみられるし、町と村のあいだの連絡手段として重視されるほど便利ではないようである。

また、次の事実も重要である。Jさんはせっかく携帯電話を持っていながら、タンブフラヌ沖合の島に向かったとき、それをXさんのもたに置いてきたのである。島は通話エリア外だし、海路を行く間には水に浸かるリスクもあろう。携帯を持参しなかったのは当然である。しかし、電源を切りっぱなしにしていたわけではない。Xさんは、Jさんの電話機をとして、ムルンベの中学校に寄宿しているJさんの養子から連絡を受けたという。そして、彼から、高校入学試験に合格したという伝言を預かっていた。

家族からの連絡は、かならずしも直接聞く必要はない。人を介して伝言を受ける習慣は、携帯が普及した現在にも有効なのである。しかし同時に、携帯電話が伝言の確実性を高めていることも事実である。ムルンベから北に向かう漁師は多いが、誰がタンブフラヌに向かうかはわからない。タンブフラヌ行きの船を探すよりは、マインティラヌの知人に電話で伝言を残しておくほうが、簡単だし確実である。

## 4.2 アンパシラヴァ村の携帯ユーザーとサービス：2010年の状況（2）

上記の時点では、アンパシラヴァ村はまだ通話エリア内に入っていなかった。いろいろな話を総合すると、アンパシラヴァ村が通話エリアに入ったのは2010年10月頃のようなのである。残念ながら、わたしが使っている携帯電話とは別の会社だった。Jさんもこのことをちゃんとわきまえていて、村でのサービスが始まる前（2010年はじめ頃）から、サービスを行う会社の機種を購入していた。わたしがプレゼントした電話機は、充電せずに放置されていた。前節の出来事があった2010年夏、わたしがJさんに連絡したのも、新しいほうの電話機の番号だった。

2011年1月にアンパシラヴァ村を訪れたときは、通話エリア内に入ったことによる変化をまだ人びとが実感しつつある最中だった。調べたところ、少なくとも既婚者16人（男性13人、女性3人、全既婚者161人のうち10パーセント）と未婚者11人（男性7人、女性4人、全未婚者278人のうち4パーセント）、合計27人が携帯電話を利用していた。前年度と違い、会って話し始めるなり電話番号の交換を申しでる者もいたから、あたらしく電話機を購入した者も多かったはずである。

男女差をみると、携帯電話の所有者には、未婚既婚を問わず男性が多い。これは、男

性の経済力を示しているのだろうか。しかし、経済力が劣るはずの未婚者も、少なからず携帯電話を利用している。一定の経済水準以上の人たちのなかでは、若者のほうが新奇なものを好むからだろう。このことは、既婚者のなかでも若い世代に利用者が多いことから示されるはずである。既婚男性の利用者13人のうち、5年以上前から村に住んでいたものは11人だったが、そのうち結婚歴が2年に満たない者は2人、2年以上5年未満の者は4人だった。実に半数以上が結婚後5年未満の若者である。

また、夫婦ともに携帯電話を持つ者は2組だった。これを多いとみるか少ないとみるかはむずかしいが、夫婦の間で携帯電話の貸し借りが普通に起こっていることは、容易に想像できる。また場合によっては、親子の間でも携帯電話の貸し借りがある。未婚女性の利用者のひとりは、電話機を実質上母親と共用していると言ったし、村内の第三者もそのことを認めていた。年長者のための連絡を子や孫の世代が仲介することも、少なからず行われていそうである。つまり、アンパシラヴァ村における携帯電話は、日本における固定電話と同じように家族共有という性格をおびているのである。

ところで、上記において利用者を特定できたのは、村のなかにある商店のひとつが有料で携帯電話を充電しているからである。村では発電機を所有する者が多いものの、電話機の充電のためだけに発電するのはやはり大げさである。一方、商店の経営者は、まだこの地域ではめずらしいソーラーパネルを発電系統に組みこんでいるため、このようなサービスができる<sup>3)</sup>。したがって、Jさんのように、発電機を起動させたときに忘れず電話機も充電していれば、商店の世話になる必要がない。上にあげた利用者数にもJさんはカウントされていないが、こうした例はごくわずかとみられる。

さらにこの商店では、電話のクレジット度を譲渡するサービスも行っている。マダガスカルでは、大多数の利用者がプリペイド方式で携帯電話を使うため、使った度数分をアカウントにチャージしておかなくてはならないのである。

都市部では普通、プリペイドカードを購入して、スクラッチ部分から現れた数字を携帯電話で入力・送信してチャージを完了させる。一方で、アカウントのクレジット度を他の利用者のアカウントに譲渡できるような電話機種もある。これを使って、電話番号とひき換えにクレジット度をチャージするサービスが職業として成りたっており、町のあちこちにパラソルを立てて顧客を待ちかまえている。客は、1,000アリアリを払えば1,000アリアリのクレジット度数を得ることができる。これが商売として成りたつのは、プリペイド方式と口座引きおとし方式とでは料金が異なるからのものである。

アンパシラヴァ村の商店主は、口座引きおとし方式で電話使用料を支払っているわけではない。だから、1,000アリアリを支払った客には、手数料を引いて800アリアリ分のクレジット度をチャージしているという。かなり割高ではあるが、町に行ったときに大量のプリペイドカードを購入しなくてはならないから、それなりに手間がかかるのだろう。また、急にプリペイドカードが必要になった客は、5キロメートル先の村まで歩

かなければならず、それとて確実に入手できるとはかぎらない。さらに、携帯電話に慣れていない人は、プリペイドカードがあっても操作方法がわからないかもしれない。このような理由のために、高い手数料をとっても客がつくのである。

#### 4.3 アンパシラヴァ村の携帯利用行動：2010年の状況（3）

実際に村が通話エリア内に入って、暮らしはどのように変わっただろうか。この話題についていろいろな人と話していたとき、肯定的な意見が続くなかで、ある人はこのように言った。「携帯は、たしかに便利だ。しかし漁師は、電話を置きっぱなしにして、常時受けとれるようにはしない。いつかけても留守番サービスばかりだ。あんまり変わってはいないよ」

漁師は今のところ、防水加工のほどこされた高価な機種を購入することがほとんどない。購買力がないというよりは、販売店の品ぞろえが限られているからである。このため、電話機を持って沖に出れば、故障するのは明らかだ。また、通話エリアもそれほど沖合にまで及んでいるわけではない。それで電話機を置きっぱなしにするというわけだ。

しかし問題は、電話機を家に置いて出ることではなく、電源を切ったままにしていることだろう。電源が入っていれば、電話を受けた家人は、漁師が帰ってから折り返し電話させればよい。それをしないのは、充電の習慣がないからである。実際、村での充電には多くの人が悩んでいる。アンパシラヴァ村には上記のようにソーラーパネルがあるからよいが、そうでない村では、所用で他の町や村に出たときに充電をしておかなくてはならない。わたしが知るマダガスカル中央高地の村落部では、電話の所有者が2人で申しあわせをして、電話番号を尋ねられたときには自分の番号と仲間の番号の2つを同時に伝えていた。つまり、実質的に彼らは2台の電話機を共有しており、交互に充電して少なくとも1台で電話を受けられるようにしているのである。

アンパシラヴァ村では、携帯電話が固定電話であるかのように用いられる、と書いた。しかし、実際に固定電話のように常時繋がるようになるためには、いま一段のインフラ整備が必要だろう。これを象徴するような話がある。アンパシラヴァ村を含む一帯の村落在住者は、2000年代半ばから海洋保護区の運営に参加しているが（飯田 2006）、この管理団体の執行部は、各村に散らばる委員が連絡をとりあえるよう携帯電話を支給した。しかし、先に述べたような充電の問題があるため、結局、うまく連絡をとりあうことができず、今度は各村にソーラーパネルを支給する計画があるのだそうだ。

とはいえ、携帯の普及に意味がなかったかといえ、もちろんそんなことはない。2010年の出漁シーズンが終わる頃には、留守番していた多くの村人たちが、北から帰郷する家族から電話で連絡を受けたという。送信する側も受信する側も、頃あいをみはからって、確実に連絡をとれるよう準備を整えたのである。そうした事実から、無線やラジオで伝えられることのなかったパーソナルな伝言が、携帯電話の普及によって始めてや

りとりされるようになったといえる。

パーソナルな伝言が可能になったことは、日本のわれわれが想像する以上に大きな効果をもたらしたようだ。これは、無線やラジオと違って家族自身の声をともなうことや、インタラクティブな受け答えが可能であることも関わっている。

たとえばある老人は、出漁先の息子から孫の出産を知らされたときの話を、順を追って逐一語ってくれた。3人の息子が漁のために村を離れてから、4カ月ほどして自分はムルンベの親戚のもとに身を寄せた。一方息子たちに同行していた嫁は、アンザヌパシ(図1参照)の実家へ行って臨月を迎えた。自分がムルンベの親戚のもとに来て5ヶ月ほど経って、その親戚の電話機に息子から電話がかかり、孫の誕生が告げられた。そのときのやりとりを直接話法で再現したあと、この老人は言った。「すぐそばに来て話してるみたいなんだ! 父親(自分の息子)はマインティラスにいる、母親はアンザヌパシにいる。わたしはムルンベに居て、彼らがムルンベに来たみたいと話しているんだ!」

村と村を船で行き来するヴェズの人たちは、陸にあがって家族や知人に帰宅ないし来訪の報告をするとき、自分の周囲や遠い土地の近況について語る。アンパシラヴァ村民が耳にするニュースの多くは、出産の知らせも含め、このようなかたちでもたらされてきた。そうでなければ、伝言をこつかつた人が、そっけなく伝言をするだけである。いずれにせよ、そうした知らせをもたらすのは、赤ん坊の父親である息子本人ではないだろう。しかし電話を使えば、息子は漁の仕事に専念しながら、その合間に遠方の母親に告知を行うことができるのだ。母親である老人の喜びは、息子の近況を本人の声によって伝え聞いたことで、いっそう増幅されたと思われる。

#### 4.4 ディレクトリの分析 (1)

アンパシラヴァの携帯ユーザーは、どのような相手と電話で連絡を取り合うのだろうか。それを知るために、2人の携帯電話機のディレクトリ(住所録)を見せてもらった。その際、登録されている個人名を書きとって、どの会社の番号を使っているか、その人がユーザー本人とどのような親族関係にあるか、どこに住んでいてどのような仕事をしているかを尋ねていった。

25歳男性の漁師M君は、A社の携帯電話を使い始めて半年ほどだが、その前に2年くらいB社の携帯電話を使ったことがある。アンパシラヴァ村がA社の通話エリアに入ってから、会社を乗りかえたのだ。彼のディレクトリには、65件の登録があった。ただし、すべてが電話番号なのではなく、送金のときに必要な銀行口座番号が1件登録されていた。また、クレジットの残り度数を見るためのサービス番号が1件と、20分間しゃべり放題の割安サービスの番号が1件あった。したがって、62件が個人の電話番号だった。自分の電話番号と、複数の電話番号を使いわけている3件(3人)の電話番号を除外すると、58人の個人がM君の電話機に登録されていることになる。

これらの個人がどの会社を利用しているかみると、A社だけを利用しているのが34人、B社だけが20人、C社だけが1人、A社とB社の併用が1人、調査者による記入漏れが2人（いずれも、A社ともう1社を利用）だった。会社は、居住地によって自動的に決まってしまうこともある。M君の知り合いには、アンパシラヴァ村とアンダヴァドゥアカ村に住む人が多かったが、2つの村を通話エリアとしているのはA社のみだった。このため、アンパシラヴァ村の知り合い8人のうち7人（1人は利用会社が不明）と、アンダヴァドゥアカ村の知り合い17人のうち14人は、A社を利用していた。一方出漁先のマインティラス市は、A社もB社もサービスを行っているため、知り合い15人のうちA社を使うのが6人、B社を使うのが7人、A社とB社の併用が1人、不明な2社を使うのが1人ときれいに分かれていた。

M君の通話相手の居住地を示したのが表1である。この表から、通話相手が限られた町や村に集中していることがわかる。M君自身の住むアンパシラヴァ村、M君の妻の出身地で、アンパシラヴァ村から5キロメートルほど離れた、人口規模のやや大きいアンダヴァドゥアカ村、郵便局や憲兵隊などの政府機関があるムルンベ市、遠隔地への出漁の拠点となるムルンダヴァ市やマインティラス市などである。いずれも、M君の訪れる機会が多い。

これらの町に住む通話相手は、M君とどのような関係にあるのだろうか。それを示したのが表2である。出漁先とそれ以外では傾向が異なっているので、表では、村から50km以内（村を拠点とした場合の生活圏）とそれ以遠の場所（出漁先）を区別した。ひとことでいえば、村を拠点とした場合の生活圏では、親族（血族）や姻族など、日本という親戚関係が多い。それに対して、出漁先ではそうした関係がほとんどない。そのかわり、出漁先では、「サービス授受」というカテゴリーにあたる人が多い。これは、ラジカセ修理工など、金銭と引き換えにサービスを提供する専門家や、塩魚を買いあげる商人など、M君の所有物を金銭と交換してくれる人たちである。また、これはM君でと

表1 アンパシラヴァに住むM君の通話相手

| 居 住 地             | 人 数 | 割 合(%) |
|-------------------|-----|--------|
| アンパシラヴァから50km 以内  |     |        |
| アンパシラヴァ (0 km)    | 8   | 13.8   |
| アンダヴァドゥアカ (約5 km) | 17  | 29.3   |
| ムルンベ (約50km)      | 7   | 12.1   |
| その他               | 7   | 12.1   |
| アンパシラヴァから50km 以遠  |     |        |
| ムルンダヴァ (約240km)   | 4   | 6.9    |
| マインティラス (約500km)  | 15  | 25.9   |
| 合 計               | 58  | 100    |

表2 M君の通話相手とM君の関係

|          | 村から50km 以内 |       | 村から50km 以遠 |       |
|----------|------------|-------|------------|-------|
|          | 人数         | 割合(%) | 人数         | 割合(%) |
| 兄弟姉妹     | 1          | 1.7   |            |       |
| その他の親族   | 8          | 13.8  | —          |       |
| 配偶者      | 1          | 1.7   |            |       |
| その他の姻族   | 15         | 25.9  | —          |       |
| 姻族の姻族    | 3          | 5.2   | —          |       |
| 血盟者      | 2          | 3.4   | —          |       |
| 知人（同性）   | 5          | 8.6   | 3          | 5.2   |
| 知人（異性）   | 1          | 1.7   | 5          | 8.6   |
| 親戚・知人の愛人 | 1          | 1.7   | 2          | 3.4   |
| 愛人       | 1          | 1.7   | 5          | 8.6   |
| サービス授受   | 1          | 1.7   | 4          | 6.9   |
| 合 計      | 39         | 67.2  | 19         | 32.8  |

※村から50km 以内に住む「その他の親族」の1人は、サービス授受に相当する連絡の相手でもあった。

くに顕著な点かもしれないが、出漁先では愛人関係の女性が多い。

村の近くに親戚が多いことは、ヴェズの人びとが血縁や婚姻関係にもとづいて社会関係を築いてきたことと対応している。このことは、「姻族の姻族」という表現からもうかがえよう。日本では親戚と認識されないような関係までもが、親族のイデオムで特定されているのである。婚姻を結ぶほかにも、ヴェズの伝統的な社会関係構築手段がもうひとつある。血を注ぎあって、文字どおりの血盟（fatidrà）を誓うことである（Koechlin 137-138）。村の近くで関係は、こうした伝統的な局面をよく表している。

村から離れた遠隔地は、アンパシラヴァ村民が訪れるようになってからまだ年月が浅いため、親族や姻族などの関係をもつ人がまだ少ない。村の近くと同じように多くの親族や姻族ができるまでには、世代を重ねる必要があろう。現在のところ、「知人（nama）」としか表現できない関係の人や「サービス授受」の相手が多いが、その一部はやがて姻族になっていくと思われる。また、別の一部は愛人になる可能性がある。何人かの「知人（異性）」は、つき合おうとM君自身が誘ったが同意しなかったのだという。

配偶者の知らないところで愛人をもつことは、ヴェズ漁民の間ではさして珍しいことではない。しかし、半年しか使用していない電話機にかくも多数の愛人が登録されていることは、特記に値する。M君は、おそらく2年前に携帯を使い始めた前後から、携帯を通じて複数の愛人と繋がりを保ってきたのだろう。日本でも、携帯電話を使ってひと晩に複数の恋人と待ち合わせをこなす「ふたまた」「みつまた」の噂を耳にすることがある。携帯電話は、遠距離通信を可能にただけでなく、通信のパーソナル化とプライバシーの厳格化を進めたといえよう。

#### 4.5 ディレクトリの分析 (2)

もうひとり、41歳男性の仲買人Nさんのディレクトリをみてみよう。Nさんの父親は、医師としてアンダヴァドゥアカ村に住んでいた人で、Nさんは漁師とはちがった育ちかたをした。しかし、高い教育を受けたわけではなく、妻の実家があるアンパシラヴァ村に住んで漁師の見習いを始めた。これは、夫方居住の傾向が強いヴェズ社会にあつては、やや変則的である。2000年代になって、村で捕れた魚を氷詰めにして町へ送る仕事にありついて、現在に至っている。このため、M君とは別のかたちで、遠くの町と関わりながら暮らしているといえる。

彼はM君と同じく、B社の携帯電話を4年ほど使ったのち、村でサービスを始めたA社に乗りかえた。A社の携帯電話を使い始めて半年ほどになる。彼のディレクトリには、90件の登録があった。クレジットの残り度数を見るためのサービス番号1件、自分の電話番号1件、複数の電話を使いわけている人(6人)の電話番号6件を除外して、82人の個人名が得られた。それら個人が使っている携帯電話会社の内訳は、A社のみ65人、B社のみ13人、A社とB社2人、A社とC社1人、B社とC社1人だった。A社のユーザーが多いことは、M君の場合と同じである。

Nさんの通話相手の居住地を表3に示した。通話距離はM君の場合よりもさらに遠くまでおよび、500km離れた首都アンタナナリヴや1000km離れた町までもが通話範囲に入っている。1000km離れた町にいるのは、最初の妻の兄弟だそうで、彼の家族やかつての姻族が町と町をまたにかけた仕事をしていることをうかがわせる。州都トゥリアラやその近郊に知り合いが多いことも、漁師と少し違う。だが、大多数の知り合いが半径

表3 アンパシラヴァに住むNさんの通話相手

| 居 住 地             | 人 数 | 割 合(%) |
|-------------------|-----|--------|
| アンパシラヴァから50km以内   |     |        |
| アンパシラヴァ (0 km)    | 11  | 13.4   |
| アンダヴァドゥアカ (約5 km) | 25  | 30.5   |
| ムルンベ (約50km)      | 9   | 11.0   |
| その他               | 20  | 24.4   |
| アンパシラヴァから50km以遠   |     |        |
| トゥリアラ近郊 (約100km)  | 2   | 2.4    |
| トゥリアラ (約120km)    | 8   | 9.8    |
| ムルンダヴァ (約240km)   | 2   | 2.4    |
| フィアナランツア (約350km) | 1   | 1.2    |
| アンタナナリヴ (約500km)  | 2   | 2.4    |
| ヴヘマル (約1000km)    | 1   | 1.2    |
| 不明                | 1   | 1.2    |
| 合 計               | 82  | 100    |

50km以内に集中している点は、M君の場合とよく似ている。

Nさんの事例でもしよかったのは、間違い電話をかけてきた相手をわざわざ登録していることである<sup>4)</sup>。表3の下の方にある、居住地が不明な人がそれである。日本でも、間違い電話で話がはずむ例があると聞かすが、それを大事に登録するというのはあまり聞かない。携帯電話が社会関係を広げる可能性を、Nさんは重視しているのではなかろうか。

Nさんの通話相手とNさん自身との関係を表4に示した。M君と大きく異なるのは、愛人がいないかわり、「サービス授受」のカテゴリーが多いことである。また、M君になかった「保護区管理関係者」「区長」ないしその両方というカテゴリーも多い。保護区関係者とは、アンパシラヴァ村を含む一帯で運営している海洋保護区の関係者のことで、委員や職員たちを指す。委員たちの連絡のために携帯電話が支給されたことは先に述べた。Nさん自身は、アンパシラヴァをはじめとする複数の村の投票で選ばれた委員である。アンパシラヴァ村には、Nさん以外にも2人の委員がいる。一方、区長とは、自治体政府(commune)の指名を受けて、村のようすを報告する者である。国政および自治体の選挙に関わる連絡や、出生手続き、遠隔地へ旅行する者の記録などを行っている。ただしNさんは区長ではない。

保護区委員や区長は、記録事務や村を超えての話し合いに時間をとるため、漁師はあ

表4 Nさんの通話相手とNさんの関係

|          | 村から50km 以内 |       | 村から50～300km |       | 村から300km 以遠 |       |
|----------|------------|-------|-------------|-------|-------------|-------|
|          | 人数         | 割合(%) | 人数          | 割合(%) | 人数          | 割合(%) |
| 兄弟姉妹     | 5          | 6.2   | 2           | 2.5   | 1           | 1.2   |
| その他の親族   | 6          | 7.4   | 3           | 3.7   | —           | —     |
| 配偶者      | 1          | 1.2   | —           | —     | —           | —     |
| その他の姻族   | 13         | 16.0  | 1           | 1.2   | 2           | 2.5   |
| 姻族の姻族    | 5          | 6.1   | —           | —     | —           | —     |
| 血盟者      | —          | —     | —           | —     | —           | —     |
| 妻の血盟者    | 1          | 1.2   | —           | —     | —           | —     |
| 知人(同性)   | 4          | 4.9   | 3           | 3.7   | —           | —     |
| 知人(異性)   | 1          | 1.2   | —           | —     | —           | —     |
| サービス授受   | 13         | 16.0  | 3           | 3.7   | 1           | 1.2   |
| 保護区管理関係者 | 9          | 11.1  | —           | —     | —           | —     |
| 区長       | 3          | 3.7   | —           | —     | —           | —     |
| 区長／管理関係者 | 4          | 4.9   | —           | —     | —           | —     |
| 合 計      | 65         | 80.2  | 12          | 14.8  | 4           | 4.9   |

※村から50km以内に住む「その他の親族」のうち2人と「その他の姻族」のうち1人は、サービス授受に相当する連絡の相手でもあった。また、村から50km以内に住む「その他の姻族」のうち2人は、保護区管理関係者でもあった。

まりやりたがらない。しかし、他の村の様子を知ることができるというメリットがあり、仲買人であるNさんにとっては職業的利益をもたらすことがある。このため、Nさんは、保護区委員の仕事に積極的である。のみならず、とくに役職上は連絡をとる必要のない区長に対しても、いつでも連絡できるように備えている。これは、保護区委員と同じく区長のもとにさまざまな情報が集まり、区長が有力な情報提供者となりうるためである。

保護区管理関係者や区長以外のカテゴリーに目を向ければ、サービス授受の関係をもつ者も含めて、近い場所にも遠い場所にも比較的まんべんなく散らばっている。M君ととくに対照的なのは、「サービス授受」が村の近くに多いことである。M君は、村から遠く離れたところで金銭的な関係を築く傾向にあったが、Nさんは仲買人という職業がら、むしろ村の近くでそのような関係を築く傾向にあるのである。Nさんの買いつけた海産物は村から数百キロメートル先にまで運ばれるが、Nさんの取引相手は村から50kmも離れることがない。

興味深いのは、Nさんが多くの人を親族関係のイディオムでなく職業的なイディオムで呼んでいることである。インタビュー調査のとき、登録された個人名がNさんの親族にあたるかどうか、わたしは注意して聞いていたつもりだったが、資料整理の段階になって、親族関係の記載のない個人が実はNさんの親族であることに気づいたケースもあった。これは、Nさんが自分との関わりを説明するにあたり、常にその個人の職業にまず言及していたためである。

このことから、M君とNさんの間では社会関係のもちかたが大きく異なることがわかるだろう。M君は、村の近くでは、親族関係をとって知己を増やしていく。しかし、通いはじめてまもない遠くの出漁先では、まだそのような関係の者が少ない。そこで、自分になにかを与えてくれる者を、知り合いのなかに加えていく。愛人もまた、心理的および物理的な満足を与えてくれると見なせるだろう。これに対してNさんは、村の近くでも遠くでも、与えてくれる者を知り合いに加えているようにみえる。けっして親族を避けているわけではないが、仲買人という職業がら、自分に似た者でなく異なった者からなにかを得ようという態度が身についているのだろう。

## 5 結びとして

携帯電話の普及によって、アンバシラヴァ村の暮らしが大きく変わりつつあることは間違いない。しかし、それはかならずしも、遠距離通信そのものの普及を意味していたのではなかった。遠距離通信の手段としては、郵便や無線が古くからある。こうしたメディアと異なって、携帯電話は、パーソナルなメッセージを伝えるのに適していた。公共性が低い話題（たとえば、子どもが生まれた）や、プライバシーに関わって伝えにくい話題（たとえば、マインティラスの知人の電話番号）が、大量に交換されるようにな

ったのである。さらには、本文中には書かなかったが、いわゆる自己充足的な携帯利用もある。2010年にわたしがアンパシラヴァ村を出てから数日して、アンパシラヴァ村の若者が「退屈だから電話した」と言って電話をかけてきたのである。携帯電話は、パーソナルなメッセージを遠くまで伝える手段として、アンパシラヴァ村の暮らしを大きく変えた。

一方でアンパシラヴァ村民の通信環境は、多種類のメディア機器に囲まれた日本に比べると、まだまだ整備する余地がある。日本では携帯電話だけでなく、固定電話や公衆電話、電子メール、スカイプといった複数の通信手段にただちにアクセスできることが多い。ひるがえってアンパシラヴァ村やその近くでは、携帯電話での連絡も確実とはいえない。充電の手段や習慣がないため、伝言してもすぐに返事を得られないことが多いのである。携帯電話は、郵便や無線、さらには口コミといった従来のメディアと併用され、補完するような段階にあるといえるだろう。もちろん、こうした補完機能のおかげで、2000キロメートルの移動距離を600キロメートルにまで節約したり、ホットなニュースを関係者の肉声で聞いて感動したり、これまでにない効果がもたらされてはいるのだが。

遠距離通信環境が今後さらに改善し、日本とそれほど違わなくなれば、季節的に居場所を変えるというヴェズ漁民の傾向は、いっそう拍車がかかると予想される。ナマコ漁やフカヒレ漁のように少人数で行う漁だけでなく、まき網漁のように大人数で行う漁（飯田 2008: 122-124, 153-154）も、遠隔地で行われるようになるかもしれない。この漁は、大魚群が回遊してこなければおこなえないが、大魚群が見つかったときに各地の仲間に連絡して加勢が得られるようにしておけば、遠隔地で展開することも可能である。こうして遠隔地でも村と同じくらい多様な漁法が展開し、村の暮らしと遠隔地の暮らしの差異が縮まれば、ほとんど居場所を確定しない漁民も増えるだろう。

ヴェズ漁民のライフスタイルの将来的な変化は、遠距離通信技術の発達だけでなく、移動手段や漁撈手段の発達にも影響を受ける。したがって安易な予断はできないが、ノマディズムにまつわる生活上のさまざまな矛盾を技術が解決・緩和し、ノマディズムの安定化をもたらしたということはできるだろう。社会生活の矛盾を技術が解決したのである。

ただし、この結論には留保がつく。携帯電話の普及は、村と出漁先の距離を縮めただけでなく、意図せざる効果ももたらした。遠距離通信のパーソナル化により、M君と奥さんとの結びつきが強まったことは、当初予想の範囲だろう。M君は、奥さんの番号を「I Love YoV」という誤りまじりの英語見出しで登録し、外泊してもラブコールを送るようになった。しかしそれは、同時に、村にいても遠隔地の愛人にラブコールを送れるようになったことを意味している。いまやM君は、どこにいても複数の女性と連絡を取り、それぞれの女性に甘い言葉をかけるようになっている。ある女性を最高だと褒めあ

げたすぐあとで、別の女性に全霊を捧げるといったことは、携帯電話がなければそうそう起こらなかっただろう。M君は、上の世代とは異なった恋愛経験を重ねている。未婚者の電話所有率が以外に高かったことは、こうした恋愛経験の変化が広がりつつあることを示しているのかもしれない。

村と出漁先が近づくという社会的変化に伴って、身を置いた場所に関わりなくパーソナリティを使い分けるといった身体的変化が生じた。このことは、広範なレベルの変化をもたらすという、電子メディアの性格をよく表している。さらに、意図せざる身体的変化が意図せざる社会変化をもたらすという可能性もありうる。遠くにいる親族からこれまで以上の援助を受けられるようになれば、村落内の非親族との関係も変わってくるかもしれない<sup>5)</sup>。

本稿の冒頭において、われわれは、さまざまな社会的矛盾をコミュニケーション技術が解決しうるかと問いかけた。この問いには、然りと答えよう。しかし、あらたなコミュニケーション技術の導入は、個人の身体レベルにも変化をせまっている。これは、電子メディアの本質である。電子メディアの普及が社会レベルの問題を解決してこと足れりとするのではなく、それにともなう身体レベルの問題をも直視し、事態の推移を見守ることが必要であろう。地域SNSは、たしかに、社会の分断化に関して一定の効果をもたらす可能性が高い。しかし、限られた局面の効果だけに目を向けるのではなく、個人の行動から社会的ネットワークのありかたまで、さまざまな水準を考慮しておかなければならない。

## 注

- 1) ただしその後、遠隔地出漁の目的地は、村にもっと近い場所に移された。140キロメートルほど離れたアンザミタルカ島、240キロメートルほど離れたムルンダヴァなどである。これらの漁場での漁獲が減ると、マインティラスはふたたび遠隔地出漁の目的地となった。これは2008年のことである。
- 2) ただし、アンバシラヴァ村から5キロメートル離れたアンダヴァドゥアカ村では、電波を受けられる場所がいくつかあった。そこには役場などの公共機関はなかったが、外国人の活動が目立っていた。スイスから来て30年以上活動しているカトリック教会の神父のほか、2003年から常駐してヨーロッパ人ボランティアと協力しつつサンゴ礁生態系を調査するイギリスのNGO職員、手術室など最新設備を備えた2008年開院の病院で働くイタリア人ボランティア医師などがいた。とくにNGO職員や医師たちは、通信環境の改善を望んでいたと思われる。
- 3) ちなみにこの経営者は、夕方になると発電機とLEDライトで店の照明をとし、VCDやDVDなどを上映して視聴料をとっている。
- 4) 執筆の段階になって、ここに登録された個人は実はNさんの愛人ではないか、という疑念が生じてきた。この個人名はVaovao(「新しい」「ニュース」の意)となっており、新しい妻の

意にとれないこともない。しかし、ヴェズの人たちの多くは、同性の仲間に対しては浮気のことを大っぴらに話すのが普通である。聞きこみをおこなったときにも、Nさんとわたしは2人だけだった。結局、Nさんは浮気のことを隠したのではなく、携帯電話がとり結んだ縁を重視して見たことのない相手を登録したのだと解釈した。

- 5) 身を置いた場所の人間関係にしばられず、その場にはいない知人たちと濃密に繋がるという「選択的人間関係」の一般化は、社会学の分野でも論じられてきた。これは、なんらかの興味や関心で結ばれた都市的な人間関係を、携帯電話などのメディアの普及が強化するという議論である(松田 2000, 2002)。アンパシラヴァ村のような村落部ではこのような傾向は認められないが<sup>5</sup>(cf. 羽淵 2003)、逆に、すでに存在している遠方の親族との関係を強化するという意味での「脱場所化」はおおいに考えられる。

## 文 献

Battistini, René

1964 *Géographie Humaine de la Plaine Côtière Mahafaly*, Paris: Editions Cujas.

Koechlin, Bernard

1975 *Les Vezo du Sud-Ouest de Madagascar: Contribution à l'Étude de l'Éco-Système de Semi-Nomades Marins*, Paris: Mouton.

羽淵一代

2003 「携帯電話利用とネットワークの同質性」『人文社会論叢 社会科学篇』9: 73-83。

飯田卓

2006 「ヴェズ漁民社会の持続的漁業をめぐる動向」深澤秀夫編『地方独立移行期マダガスカルにおける資源をめぐる戦略と不平等の比較研究』平成14年度～平成17年度科学研究費補助金研究 基盤研究 A (1) (研究課題番号 14251004) 成果報告書, pp.7-19。

2008 『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』世界思想社。印刷中 「道路をバイパスしていく電波——マダガスカルで展開するもうひとつのメディア史」羽淵一代・内藤直樹・岩佐光広『メディアのフィールドワーク——アフリカとケータイの未来』東京: 北樹出版。

大澤真幸

1995 『電子メディア論——身体のメディア的変容』新曜社。

マクルーハン, マーシャル

1987 『メディア論』栗原裕・河本伸聖訳, みすず書房。

松田凡・赤嶺淳・飯田卓

2005 「映像の体験化——大学講義の現場から」飯田卓・原知章編『電子メディアを飼いならす——異文化を橋渡すフィールド研究の視座』pp.126-143, せりか書房。

松田美佐

2000 「若者の友人関係と携帯電話利用——関係希薄論から選択的關係論へ」『社会情報学研究』4: 111-122。

2002 「モバイル社会のゆくえ」岡田朋之・松田美佐編『ケータイ学入門——メディア・コミュニケーションから読み解く現代社会』pp.205-227, 有斐閣。